



ナガサキ ピース・タイムズ

発行者【THE PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
(にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい)
〒852-8117 長崎市平野町7番8号
長崎市平和推進課内
電話:095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail:info@nucfreejapan.com
ホームページ:http://www.nucfreejapan.com

NAGASAKI PEACE TIMES

非核協 おやこ記者新聞

Circle of peace (平和の輪) ～思い受け継ぎ繋がる世界 被爆76年目のここナガサキから～



2021(令和3)年は全国のおやこ記者9組18人が「ナガサキ・ピース・タイムズ」作りに参加しました。新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、昨年に続き在宅のリモート取材を行うことになりましたが、パソコン越しの被爆者の方々への取材や記事作成などを通して、長崎から発信された「平和の種」をしっかりと受け取り、それぞれの地域にまいていきます。
【編集部】



被爆76周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典
「平和への誓い」被爆者代表
おか のぶこ
岡 信子さんから
おやこ記者のみなさんへ
特別メッセージ



戦争や核兵器はどうしたら
無くなると思いますか？

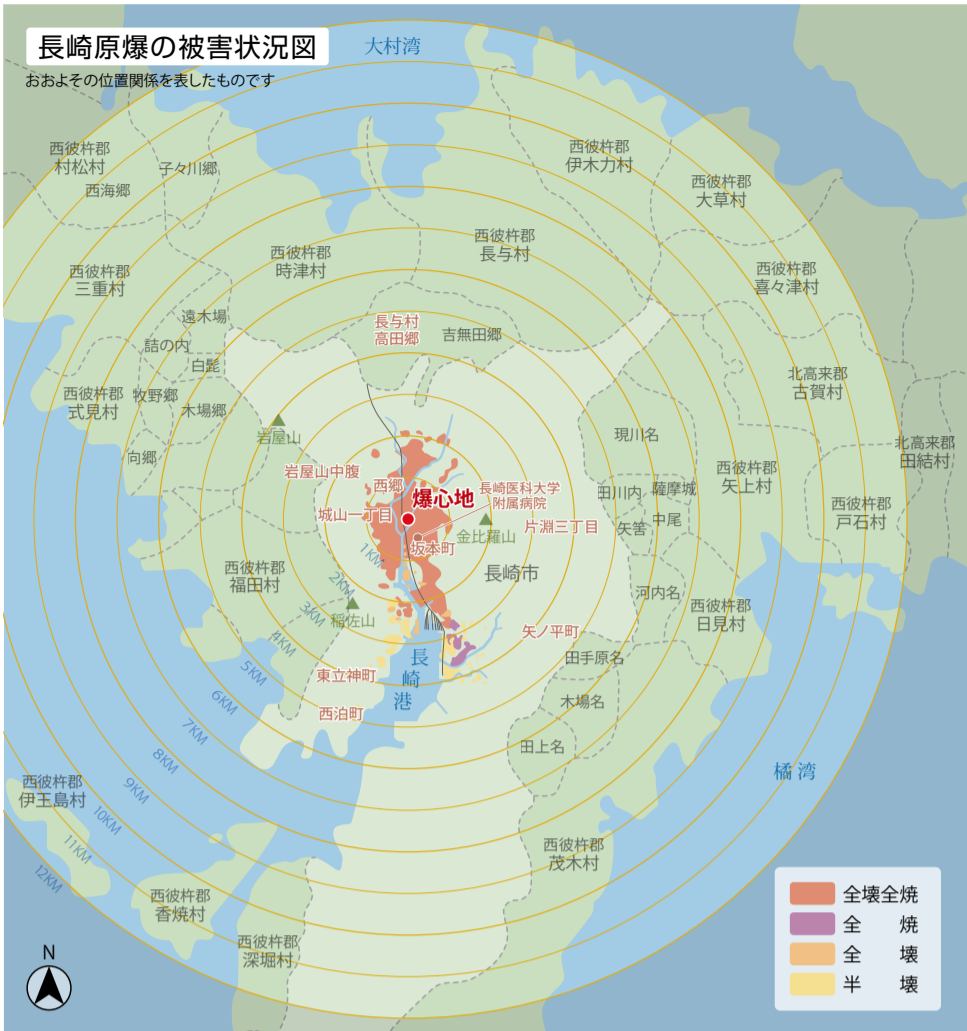
現在でも外国では戦いをやり罪もない人達が亡くなっています。戦争は国と国との争いです。両方が手を握り合い仲良くすると戦争は無くなるでしょう。でも核兵器を作る国もあります。核兵器を禁止するには核を作っている国が止めること。それが無い限り世界平和はないと思います。被爆国の日本さえ核兵器禁止

全国のおやこ記者9組に伝えたい
平和へのメッセージをお願いします。



原爆で多くの人が亡くなり、長崎は地獄戦場そのものでした。当時は食べるものもなく、ひもじさに泣く子をあやし、親は飢えて倒れても子どもだけはと祈る思いで過ごしました。そんな日々は遠い昔のことではありません。手の平一杯の白米はダイヤモンドの輝きより尊く、おかゆにして子どもの口に与えました。原爆、核兵器の持つ威力は悲惨です。亡くなった人達の願いと祈りと、生き残った人達の回復の

※メッセージは原文のまま掲載しています。



被爆した地域	
松本 美都恵さん	西彼杵郡長与村高田郷
三瀬 清一郎さん	長崎市矢ノ平町
羽田 麗子さん	長崎市片淵三丁目
小峰 秀孝さん	長崎市西郷
今道 忍さん	長崎市西泊町
岩永 芙美子さん	長崎市東立神町
池田 松義さん	長崎市城山町一丁目
池田 道明さん	長崎医科大学附属病院 (長崎市坂本町)
松尾 幸子さん	長崎市岩屋山中腹

※地名等は被爆当時のものです

1945(昭和20)年8月9日11時2分。
一発の原子爆弾が長崎市上空でさく裂し、多くの犠牲者が出ました。被爆76年目の今年、9名の被爆者の方々に被爆当時の体験や記憶、平和への思いをお聞きしました。



被爆者の池田道明さんに話を聞きました。池田さんは小学1年の時に、母の勤めていた大学病院で被爆しました。逃げる途中、ひどい火傷を負ったり、目が飛び出だしたりして死んでいる人がたくさんいたそうです。

「日本が負けた時の気持ちは」と質問したら「抑圧



ぼくは被爆者の三瀬清一郎さんに原爆について聞きました。三瀬さんは原爆が落ちる前、家でオルガンをひいていました。するとアメリカの飛行機の音とましがえられるからやめなさいとおばあさんが言いました。それで、オルガンのふたを閉めました。閉めた後すぐ、音とともにものすごい強い

被爆直後、体をさすってくれたお母さん

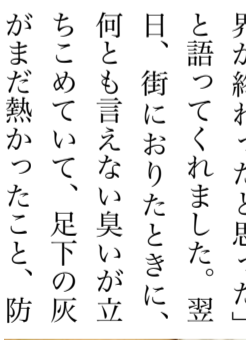
—被爆者 三瀬 清一郎さん—



風がおそつてきました。気がつくとな家の中が数秒前と全くちがっていました。お母さんが子どもみんなの名前を呼び、子ども達はお母さんのところへ行き、一人一人けがはないかお母さんは子どもの体をさすりました。全員無事でした。

三瀬さんの話を聞き、この様な悲しい話がないように友達にも伝えたいと思いました。

「向井 空・真樹子 記者」



11歳の時に爆心地から1.3キロメートル離れた山中で被爆した松尾幸子さんは、8月9日のことを閃光と爆音のあと、気がついた時には周りは真っ暗で何が起こったかわからず、街の様子を見に行くと街全体が真っ黒な物で覆われていて、「世界が終わったと思った」と語ってくれました。翌日、街におりたときに、何とも言えない臭いが立ちこめていて、足下の灰がまだ熱かったこと、防



伝え続ける被爆者の記憶と想い

～私たちに託されたもの～

—被爆者 松尾 幸子さん—

空壕の中が人でいっぱい、横になることができなかったこと、食べ物がないおなかのすいて辛かったことなど、当時の出来事を話してくれました。

終戦を迎えて、長崎市を離れ親戚の家に行き、横になったとき「生きていてよかった」と思ったという話が心に残りました。

また、二度と自分と同じ経験をしてもらいたくないという思いから、語り部を続けているというお話を聞き、一刻も早く核兵器のない世界が実現できるよう、私達が松尾さんの記憶と想いを伝えていこうと思いました。

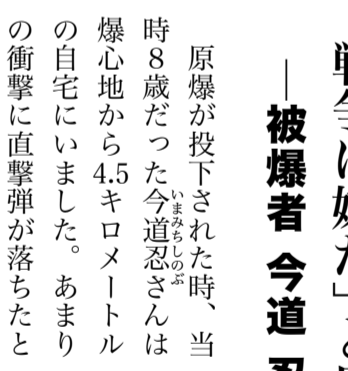
「黒木 結布・千恵子 記者」

子どもたちには、戦争がなく平和な世界をつくらしてほしい

—被爆者 池田 道明さん—



されていたのがなくなるということで、ほっとした」と答えてくれました。答えて「悔しい気持ち」かなと予想していた自分には意外でしたが、戦争中、厳しい生活を送っていたことがよく分かりました。「戦争が終わって76年経ったが、その間世界で戦争がなかつ



た時はない。子どもたちには戦争がなく平和な世界をつくらしてほしい。池田さんのこの言葉を聞き、僕も戦争のない平和な世界をつくりたいと思いました。

「五十嵐 陽希・亨 記者」



原爆で親友をなくした「戦争は嫌だ」と思った

—被爆者 今道 忍さん—

原爆が投下された時、当時8歳だった今道忍さんは爆心地から4.5キロメートルの自宅にいました。あまりの衝撃に直撃弾が落ちたと

思いました。幸い家族はみんな無事でしたが、疎開する途中に入市被爆しました。一面焼け野原で見た馬の死骸や、たまらない

空壕の中が人でいっぱい、横になることができなかったこと、食べ物がないおなかのすいて辛かったことなど、当時の出来事を話してくれました。

終戦を迎えて、長崎市を離れ親戚の家に行き、横になったとき「生きていてよかった」と思ったという話が心に残りました。

また、二度と自分と同じ経験をもらいたくないという思いから、語り部を続けているというお話を聞き、一刻も早く核兵器のない世界が実現できるよう、私達が松尾さんの記憶と想いを伝えていこうと思いました。

「黒木 結布・千恵子 記者」

変な臭いを今でも鮮明に覚えています。

小学校には「鬼畜米英」と書かれたポスターが貼られてあって、敵国人は人間の姿をしている鬼だと教えられていました。だから兵隊にみんな憧れていました。でも原爆で親友が亡くなったときは「戦争は嫌だ」と思いました。今道さんが平和と案内人をするきっかけになったのは戦争風化が怖かったからだそうです。私も大切な人を守るために原爆の悲惨さをちゃんと伝えていきたいです。

「道上 香蓮・有香 記者」



上空から見た被爆前の長崎市(写真上)
上空から見た被爆後の長崎市(写真下)
〈いずれも米軍撮影/長崎原爆資料館所蔵〉



核兵器のない、戦争のない世界に

被爆者 岩永美美子さん



僕は被爆当時1歳だったという岩永美美子さんから話を聞きました。爆心地から1.8キロメートルの地点で被爆したお父さんが包帯まみれで帰ってきた姿を見て、幼いながらに「お化けだ!」と言ってしまったお話。今では到底考えられないことで、戦争は恐ろしいものだと感じました。また原子爆弾はその時



「鈴木智久・誓子記者」



池田さんが一番悲しかったときは、父親と母親と曾祖母を焼いているときだと言っていました。私も自分で家族を焼くなんてできないと思いました。原爆はお

の威力もすさまじいけど、その後の放射能もさらに人々を苦しめました。そんな恐ろしい核兵器は世界からなくすべきだと思えました。僕たちが友達と仲良くするように、国と国も相手のことを考えて平和な世界を作っていました。



私は被爆者の池田松義さんにお話を聞きました。

池田さんが見た被爆した人々は、体が真っ黒になり、目が飛び出たり、内臓が出ていたりしていたそうです。その人たちは、水を飲むと次から次へと死んでいったそうです。水を飲んだだけで亡くなるなんて信じられませんでした。

被爆者である羽田麗子さんに当時のお話を聞きました。一発の原爆で多くの人の命や町が一瞬にしてなくなったそうです。また、その中を生きのびた人も苦しい思いをして後に亡くなった方が沢山いたという話を聞いて、戦争の恐ろしさと怖さを知りました。絶対に戦争をしないためにも、一人一人が戦争のことを知り、次の世代にも伝えていか



池田さんの被爆体験を聞いて

被爆者 池田 松義さん



「岩崎歩美・惣一記者」

そろしいし、戦争はしたくないと思えました。池田さんが一番伝えたいことは、どんな社会になつたらいいかを考えて、方向と方針を立てて平和な世界を作っていくことだと思えました。私たちにできることをさがして世界を平和にしていきたいです。

「三つの約束」を絶対に守っていききたい

被爆者 羽田 麗子さん



「中嶋英心・由美子記者」

インタビューの最後、羽田さんは三つの約束を話してくれました。一つ目は自分の命、友達の命を大切にすること、二つ目は差別をしないこと、三つ目は暴力を振るわず話し合いで解決をすることです。僕はこれからこの「三つの約束」を絶対に守っていききたいです。

3歳の記憶がないのはとても幸せなこと

被爆者 松本美都恵さん



僕は3歳の時に被爆した松本美都恵さん取材しました。小さくて足が遅いからと、おんぶをされて防空壕に逃げた時に、お母さんの背中から「怖い」がすぐく伝わってきたことを覚えているとおっしゃっていました。

「今の子供達は平和な環境に満たされていて、3歳の時のことは、ほとんど覚えていないと思うけれど、それはとても幸せなことなんだよ」という美都恵さんの言葉が僕の心に突き刺

原爆は過去のことじゃない ～過去と今をつなぐ使命～

被爆者 小峰 秀孝さん



「米田智駿・美由紀記者」

原爆は過去のことじゃない。過去と今をつなぐ使命。僕らは過去と未来をつなぐことだと強く思いました。僕が、ひどい状態でしたが、ひどい状態でも僕が思わず目を背けてしまっていました。被爆者の方は被爆した時の傷も辛いと思いますが、被爆後の生活の中でいじめられたり、放射線の影響で健康が心配になったり、今も苦しい思いをしていることを知りました。原爆の話は昔の話ではなく、現在の話でもあることを深く学ぶことができませんでした。僕たちの使命は過去と未来をつなぐことだと強く思いました。



「那須陽向・真季記者」

さっています。また「仕事をしえない」という言葉も心に残りました。仕事をしえないことは苦しく悔しいです。でも次を起ささないためには許すという気持ちが必要です。大切なんだなと思います。僕はそういう強い心の持ち主になりたいと思いました。





ナガサキ・ユース代表団第9期生の村上文音さんにお話を聞きました。村上さんには「戦争とは国のトップ同士のケンカで、トップの人たちはけがをしないけれど、戦争をやりたくない一般市民がけがをしている」と教



林田望愛さん(左)と羽山嵩裕さん(右)

ぼくは第24代高校生平和大使2人にインタビューをしました。平和大使の主な活動のひとつは、街かどで核兵器をなくすための署名を集めて国連に送ることです。ぼくが質問したことは、①なぜ(平和大使を)しようと思ったのですか ②将来、この活動を続けま

高校生平和大使という活動を知り、ぼくも平和な世界を作りたい

第24代 高校生平和大使

— 林田望愛さん、羽山嵩裕さん —

平和には若い世代の情報発信力が必要

ナガサキ・ユース代表団第9期生

— 村上文音さん —



えていただきました。なぜ、戦争をやりたくない一般市民がけがをしないのか、ふしぎに思いました。また、原爆の被害を過去のこととしてしまいやすいですが、被爆者の方々の話を聞くと、昔ではなく、今現在の問題だということが分りました。原爆は人の生活を破壊し、人間らしい死に方をさせない許すことのできないモノです。それなのに、原爆の知識は日本でも、ましてや海外な



らなおさら教育がされていらないことを知りました。村上さんは情報発信の要とおっしゃいました。まずは自分にできることを考え、発信していきたいと思いました。

被爆体験を語り継ぐ 永遠の会 代表・大塚久子さん



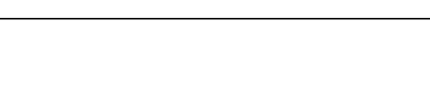
僕はオンラインで国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティア「被爆体験を語り継ぐ

永遠の会」の大塚久子さんにお話を聞きました。大塚さんは、朗読ボランティアのための研修を受け、現在は祈念館内や学校などで被爆体験記を朗読し、原爆の悲惨さや平和への願いを伝える活動をしています。「体験記を読んで、当時は想像し

するようになっている」という言葉が印象的でした。被爆者の高齢化が進んで、戦争を知らない世代が増える中、被爆者の記憶を伝えることはとても大切だと思いました。過去の悲惨さを知って、未来の平和を考えていく。僕も今回のおよこ記者で得た体験を周りの人たちに伝えていこうと思います。



今回、藤田さんや被爆者のお話を聞く中で、私が考えたのは「戦争のない世界をつくるために、戦争を知らない私達は何をすればよいのだろう」ということです。藤田さんは、まず「知るこ



「黒木結布・千恵子記者」

すかの二つです。①の答えについて、林田望愛さんは平和について考えたことがなかったから、羽山嵩裕さんは、おじいさんのお兄さんが

被爆二世である崎山昇さんに話を聞きました。両親とも被爆者で体が弱く、昇さん自身も常に健

康不安を抱えていました。生活は苦しかったそうですが、幸い奨学金で大学まで行くことができました。でも、他の被爆二世の方々の中には、お金がなくて十分な教育を受けられなかったり、結婚が破談になって自殺を図ったりした方もいたそうです。

特に印象に残ったのは、「日本は被害者である反面、アジアに対しては加害者になっていった。だから、戦争そのものに反対してほしい」と言っていたことです。戦争のことで知らないことがまだまだいっぱいあるけど、一発の原爆が子や孫にまで被害が及び、今も苦しんでいる人がいることは決して忘れてはいけな

被爆者の証言を語り継ぐ、家族・交流証言者の藤田幸代さんに話を聞きました。私は「交流証言者」という言葉を聞いたのは今回が初めてでした。被爆者の方から何度も聞き取りをし、原稿を何度も見てもらって、被爆者に代わって事実を伝えるという、大変な活動であ

ることを知りました。藤田さんは、被爆者の高齢化が進み、被爆者が語り部を行うことが難しくなってきたこと、自身が被爆二世であること、大好きな長崎のために何かしたいと思ったこと、という三つの理由から交流証言者に応募したと話してくれました。

「黒木結布・千恵子記者」

「黒木結布・千恵子記者」

被爆者で、それを伝えなかったけど、どの学校でも平和活動をやっているわけではなかったから、どうにかしたいと思ったから、平和大使になったそうです。

②の答えについて、平和大使の経験を活かし、羽山さんは政治家になって新しい政党を作って平和活動をしたい、林田さんは国際司法裁判所で裁判官になりたいと言いました。

被爆二世である崎山昇さんに話を聞きました。両親とも被爆者で体が弱く、昇さん自身も常に健

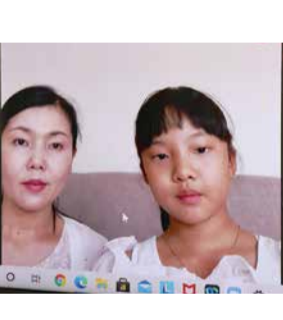
被爆者の証言を語り継ぐ、家族・交流証言者の藤田幸代さんに話を聞きました。私は「交流証言者」という言葉を聞いたのは今回が初めてでした。被爆者の方から何度も聞き取りをし、原稿を何度も見てもらって、被爆者に代わって事実を伝えるという、大変な活動であ

被爆者の証言を語り継ぐ、家族・交流証言者の藤田幸代さんに話を聞きました。私は「交流証言者」という言葉を聞いたのは今回が初めてでした。被爆者の方から何度も聞き取りをし、原稿を何度も見てもらって、被爆者に代わって事実を伝えるという、大変な活動であ

被爆者の証言を語り継ぐ、家族・交流証言者の藤田幸代さんに話を聞きました。私は「交流証言者」という言葉を聞いたのは今回が初めてでした。被爆者の方から何度も聞き取りをし、原稿を何度も見てもらって、被爆者に代わって事実を伝えるという、大変な活動であ

被爆者の証言を語り継ぐ、家族・交流証言者の藤田幸代さんに話を聞きました。私は「交流証言者」という言葉を聞いたのは今回が初めてでした。被爆者の方から何度も聞き取りをし、原稿を何度も見てもらって、被爆者に代わって事実を伝えるという、大変な活動であ

日本は被害者であり加害者。戦争そのものに反対して



被爆者の証言を語り継ぐ、家族・交流証言者の藤田幸代さんに話を聞きました。私は「交流証言者」という言葉を聞いたのは今回が初めてでした。被爆者の方から何度も聞き取りをし、原稿を何度も見てもらって、被爆者に代わって事実を伝えるという、大変な活動であ

被爆者の証言を語り継ぐ、家族・交流証言者の藤田幸代さんに話を聞きました。私は「交流証言者」という言葉を聞いたのは今回が初めてでした。被爆者の方から何度も聞き取りをし、原稿を何度も見てもらって、被爆者に代わって事実を伝えるという、大変な活動であ

被爆者の証言を語り継ぐ、家族・交流証言者の藤田幸代さんに話を聞きました。私は「交流証言者」という言葉を聞いたのは今回が初めてでした。被爆者の方から何度も聞き取りをし、原稿を何度も見てもらって、被爆者に代わって事実を伝えるという、大変な活動であ

スポーツで平和を伝えることはいいな

V・ファーレン長崎

—社長・高田春奈さん—



私は、長崎のプロサッカークラブのV・ファーレン長崎の社長の高田春奈さんに話を聞きました。わたしは、チームと地域で協力して平和活動をしていることを知りました。高田さんは、スタジアムは愛がいっぱいだと

したくなるし、スポーツで平和を伝えることはいいなと思えました。高田さんは、平和活動をやっているいろんな人と出会ったことがよかったと言っていました。私は、特別なことだけじゃなく毎日の生活の中で相手と仲良くして、小さな平和を作りたいと思いました。

【岩崎歩美・惣一記者】



「長崎の郵便配達」という映画を制作した川瀬美香監督にお話を聞きました。この映画は、被爆者の谷口稜嘩さんの体験をインタビュアーして本にまとめたピーター・タウンゼントさんの娘さんが、長崎の町で追体験しているドキュメンタリー映画です。「自分が経験して

平和への思いをつなぐ

映画『長崎の郵便配達』をとおして

映画監督・川瀬美香さん



いないことを映画にすることはとても難しいことと川瀬監督は話してくれました。また、映画を作りたいという気持ち

がみんなの心を動かして完成した作品だと教えてくれました。この映画を友達みんなに観てほしい僕も観たいです。そのため



【米田智駿・美田記者】

人に上映の相談をしようと考えています。強い思いを持って最初の一歩から少しずつ行動していけば、長崎と石垣の思いをつなぐことができると思います。

正確な事実を伝えていくことの大切さを学ぶ

—自然史研究者・布袋厚さん—



自然史研究者であり『復元！被爆直前の長崎』の作者の布袋厚さんからお話を聞きました。

被爆当時を知る人が少なくなる中、後世に残さなければとの思いで本の制作を始めたそうです。原爆直前の長崎の町の地図を制作したことで、当時の様子が正確に分かるようになったそうです。本の中では、「町は一瞬のうちにすべてが灰になったわけではない」と書かれていました。爆心地140メートルあたり

た。その周囲は、すぐに火事にならないでくすぶった物が、一時間ぐらいいして炎上したそうです。僕は布袋さんに話を聞くまで、原爆で町が一瞬で灰になったと思っていました。違う真相があったことが分かりました。イメージではなく、正確な事実を伝えていくことの大切さを学びました。

【中嶋英心・由美子記者】



田川誠さん(左)と深澤慎也さん(右)

ファッションとアートを通して平和を考えるきっかけに

—田川誠さん、深澤慎也さん—



(写真左端)モデル、被爆2世の三重式美さん (写真右端)モデル、11歳の関口舞さん (写真提供/梅村俊・梅村真理子さん)

から集まったハンドスタンでできたアート作品が飾られ、応募で選ばれたモデルによるファッションショーが行われました。コロナ禍で無観客による開催でしたが、YouTubeで配信されました。「コロナ禍だからこそ、何ができるかを考えて発信していきたい」「戦争は悲しく辛いことだけど、アートを通してワクワクしたり楽しんだりしてもらって、平和を考えるきっかけにしてほしい」と話してくれたお二人の作品を、ぜひたくさんの人に見てほしいと思います。【五十嵐陽希・亨記者】

平和へのメッセージ2021

長崎県立大学シーボルト校新聞製作演習のみなさんに「あなたが考える平和とは？」のテーマでメッセージを書いてもらいました。



「今日も楽しかった！」
小さな幸せに気づき、生きてると皆が感じられるような平和世界に
—荒木 瑞姫—



周りのみんなが元気なこと、美味しいご飯を食べること、小さな幸せに気づいて、共有し、平和な世界を守り続けていきたいです。
—藤元七海—



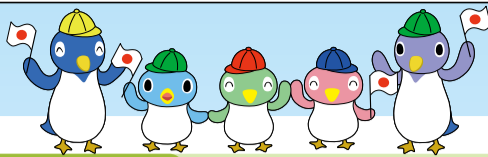
人にも国にもそれぞれに正義があるだろう。しかし、正義をかざした傲慢な振舞いではなく、まずは地球上のすべての人、動物、草木の命に畏敬の念をもつ謙虚さを！
—金村 公—



あの時と変わらない綺麗な空を見上げ、この平和な日々からこの先の平和を祈ります。
—犬田 朱莉—



道端のちよつとしたものにも心弾ませられる幸せ。平和な空が続きますように。
—花浦 彩乃—



令和3年 広島・長崎への原爆投下と 終戦から76年目の夏

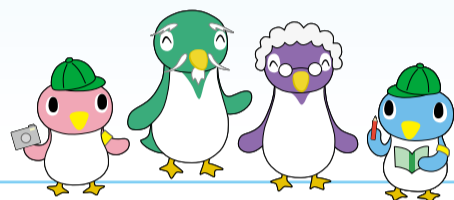
私たちのふるさとで調べ、 学び、考えた「戦争」と「平和」

全国9組18人のおよこ記者が
それぞれ住む地域の取材をしました。

2021(令和3)年。1945
(昭和20)年8月9日の原爆投下
から、長崎は76回目の夏を迎えま
した。今年の日本非核宣言自治体
協議会(非核協)主催の親子記者
事業には、全国から71組の応募が

あり、抽選で選ばれた9組18人の
親子がオンラインで参加すること
になりました。

およこ記者のみなさんは、長崎
へのリモート取材に先がけて、そ
れぞれの地域で「平和」について



北海道 旭川市 五十嵐陽希・亨 記者



平和の碑

7月25日に留萌市大町
二丁目にある「平和の碑
(樺太引揚三船殉難者慰
霊碑)」を訪れました。

この碑は、1945(昭
和20)年8月22日に起き
た「三船殉難事件」(樺
太、現在のサハリンから
引き揚げる避難民を乗せ
た「小笠原丸」「泰東丸」
「第二新興丸」の三船が、

命の大切さを学んだ「三船殉難事件」

旧ソ連軍の潜水艦の魚雷
攻撃を受け、1708名
が犠牲になった事件)の
慰霊者を悼むために、
1995(平成7)年11
月15日に建てられました。
こんな身近なところで、
1708名も犠牲になっ
たことを知り、もつと命
を大切にしなければな
いと思いました。



「誓い」の碑文

山形県 米沢市 中嶋英心・由美子 記者



戦死した石川一美さん

米沢市に在る(公財)農
村文化研究所戦争資料館
で、山形大学の阿部宇洋
先生にお話を聞きました。
貴重なお話の中で印象
に残ったのが、1941
(昭和16)年に戦死され
た石川一美さんの事です。
石川さんが残されたトラ
ンクの中には、石鹼箱、
万年筆、軍人手帳、中隊
長2名の手紙等が入って
いました。手紙は2メー

印象に残った戦死者の遺品

トルと長くそこには、戦
死状況と模範的軍人で
あつたことが事細かく書
かれていました。戦況も
まだ厳しい時ではなく石
川さんのお葬式をあげる
事ができたそうです。戦
況が悪くなるにつれ、戦
死された方の遺品も少な
くなり最後は遺品も無く
石が送られてきたそうで
す。



石川一美さんのトランク

愛知県 半田市 那須陽向・英夫 記者



赤レンガに残る弾痕

僕は近所の戦争を体験
した人達の家を訪ねイン
タビューをしました。ど
の人も「戦争は食料が無
くなり飢えるから、絶対
にしてはいけない」と訴
えていました。僕の住ん
でいる半田市は、戦時中
日本最大の飛行機製造会
社の中島飛行機半田製作
所があり、日本全国から
朝鮮の方々までも動員さ
れ、戦闘機や偵察機の生
産をしていたそうです。
そのために街は空襲にあ
い272人以上の人が亡

初めて真剣に考えた戦争のこと

くなりました。その空襲
の跡は今でも赤レンガの
ビル工場の跡地等に残
されています。

僕は戦争を経験したこ
とがなく、戦争について
深く考えたことがありま
せんでした。地域の人達
の話聞き、「戦争は人
の命をなくし食料も無く
す、誰もが苦しむことだ
から、未来に向けて決し
て起こしてはならない、
戦争のきつかけをどうし
たらなくせるだろう？」
と初めて真剣に思いまし
た。



雁宿公園の平和記念碑で献花

大阪府 茨木市 岩崎歩美・惣一 記者



係の方の説明を聞く

私は、茨木市で開催さ
れていた非核平和展に行
きました。そこで、プロ
パガンダという宣伝を見
ました。戦争をする国は、
メディアと共同して
「我々は戦争をしたくは
ない」「しかし、敵側が
一方的に戦争を望んだ」
「この正義に疑問を投げ
かける者は裏切り者であ
る」という「うそ」を繰
り返し流したと書いて
あつて驚きました。

非核平和展で学んだこと

私がとくに印象に残つ
ているのは、高校生が被
爆者の人に話を聞いて描
いた原爆の絵画です。そ
の中でも、体が真っ黒に
なつて、くちびるがめく
れている(被爆者の)絵
が印象に残っています。
それを見て原爆はおそろ
しいものだと思いまし
た。

私は、戦争はあつては
ならないものだと思います。
だから、ここで学
んだことをいろんな人に
伝えていきたいです。



原爆の絵画

神奈川県 相模原市 鈴木智久・勝久 記者



陸軍造兵廠跡碑

僕の住んでいる相模原
市には現在3つの米軍基
地があります。それらは
第2次世界大戦中に整備
された旧日本軍の施設で、
終戦後米軍に接収されま
した。自宅近くの相模原
合補給廠は相模陸軍造兵
廠として兵器の製造や修
理を行っていました。施
設のあつた場所は現在の
JR沿線にあり、当時の
国鉄本線からの支線が基
地の中に入っていく線路
の痕跡は今も残っていま

戦争を通して発達した僕の町に驚き



基地に入る支線の痕跡

す。軍施設があつた相模
原にも戦闘機による機銃
掃射により尊い命をなく
された方やケガをされた
方は多数いました。でも、
爆撃機による大規模空襲
はありませんでした。そ
の理由ははっきりしませ
んが、現在の米軍の基地
利用状況から戦後利用を
考え、敢えて空襲がな
かつたと考えられています。
農村だった相模原は
軍施設により都市建設が
進みました。僕の住む町
が戦争を通して発達した
ことを知つてとても驚き
ました。



- 1) 戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと
- 2) あなたの住む地域にある平和資料館等の施設を訪ねて学ぶこと
- 3) あなたの住む地域の平和イベントに参加したり、地域で平和を伝える活動をしている人に会ったりして学んだこと
- 4) 家族で考えた「平和」や「命の大切さ」について



このコーナーでは、おやこ記者のみなさんがそれぞれ生まれ育った地域で戦争の痕跡を調べ、学び考えた平和や大切な命についてのレポートをご紹介します。
【編集部】

九州代 宮崎県 日向市 黒木 結布・千恵子 記者

私は、『日向市史』を読んで、鹿児島から飛び立つていった特攻隊の待機基地だった富高海軍飛行場があったことを知り、現在も残っている滑走路の跡を見に行ってみました。

現在は病院の駐車場になっていますが、きれいな駐車場の間に古いコンクリートの滑走路とその



富高海軍航空基地 滑走路跡

戦争の恐ろしさや悲しさを伝える滑走路跡



現在 医療法人 向洋会 協和病院内

滑走路をふさぐようにおとされた爆弾のあとがありました。この滑走路を通過して、自分が爆弾となつて飛びたつて行った人達がたくさんいたこと、特攻を阻止するために飛行場やその周りに爆弾がおとされたことを知りました。

大事に残された滑走路の跡や爆弾のあとは、私に戦争の恐ろしさや悲しさを教えてくれました。

沖縄代 沖縄県 石垣市 米田 智駿・美由紀 記者



「戦争マラリア」のことを伝える活動をしている綿貫円さんにお話を聞きました。

「戦争マラリア」で亡くなった人を運ぶとき、最初は4人で運んでいたのが2人になり、最後は1人で遺体を担いで運んだことを教えてくれました。

戦争でいちばんこわいこと

た。それを聞いた時、僕は、周りの人が次々に亡くなっていくのがこわいと思えました。でも、戦争中に生きていた人は慣れてしまい、次は自分の番だと感じていたそうです。人が亡くなるのが普通になると、いろいろな気持ちを感じる感覚が鈍っていくことがわかりました。戦争でいちばんこわいのは、人間としての感情が失われていくことだと強く思いました。

※「戦争マラリア」とは、太平洋戦争末期に、八重山諸島の一般住民がマラリア感染症の発生している地域に強制移住させられ、多くの人命が奪われたこと（編集部）。

中国代 広島県 東広島市 道上 香蓮・有香 記者



東広島市原爆資料展示室

東広島市原爆資料展示室で被爆者の御堂義之さんと伝承者の若山隆英さん、細川文子さんにお話を聞きました。

御堂さんは当時9歳で、爆心地から約1.5kmのところに住んでいました。8月6日は上空に飛んできた飛行機を見るために庭に出ていました。そして原爆があつて、お兄さんは大火傷を負い1週間

理解できない大事な人の命を奪う戦争

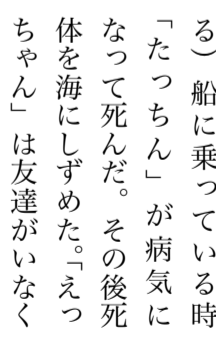
私には、家族も悲しみも奪ってしまう戦争は絶対いけないことだと心から思いました。

後に、お母さんは2ヶ月後に亡くなりました。御堂さんは塙に守られて無事でしたが独りぼつちになりました。しかし、悲しむ暇もないほど生きるのに必死でした。



御堂義之さん（左端）

四国代 高知県 高知市 向井 空・真樹子 記者



メモをとる 向井空記者

ぼくは戦争（1932—45年）を本で読んで、話を聞いたりして、経験者の気持ちを知った。例えば、『えつちゃん』のせんそうの本だ。終戦後、「えつちゃん」と友達「たつちゃん」が（中国から日本に引きあげられる）船に乗っている時「たつちゃん」が病気になるって死んだ。その後死体を海にすてた。「えつちゃん」は友達がいない

戦争を知り、感じた経験者の思い

なつたことが悲しかった。次はおばあちゃん（向井圭子さん）の話だ。家族は広島県呉市から風早町（現在の東広島市安芸津町風早）に移り、爆撃を受けなかった。もし呉にいたら家族が死んでいただかもしれない。悲しかったと思う。

戦争をたくさん知り、経験者の思いを感じたので、どれだけつらいことかをもっと多くのの人に知ってほしい。

後編 編集 記事



事務局だより

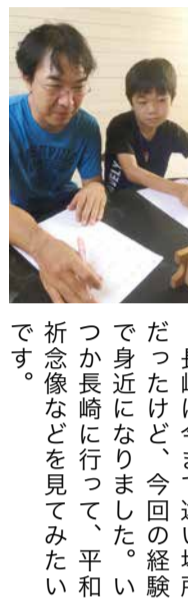
今年度の親子記者事業のテーマは「Circle of Peace (平和の輪) 思い受け継ぎ繋がる世界 被爆76年目のここナガサキから」です。

事務局 (長崎市平和推進課) 三浦 大河

北海道 旭川市 五十嵐陽希・亨 記者

長崎が身近な場所に

今回の取材で平和について考えることができた。池田さん、田川さん、深澤さんが教えてくれたことをみんなにも伝えたいです。



山形県 米沢市 中嶋英心・由美子 記者

自分の意見を主張できるように勉強します

取材の後、布袋さんの本を見ながら、羽田さんが被爆した場所や金毘羅山、爆心地を地図で調べました。被爆した人たちが金毘羅山を必死に登り助けを求めてきた話を聞きましたが、どのようにならなりましたか、考えても想像が付きません。



神奈川県 相模原市 鈴木智久・誓子 記者

今回の貴重な経験を伝えたい

今回おやこ記者をやった、戦争は二度と起こしてはいけないと改めて思いました。戦争や原爆のことは本で読んでなんとなく知っていたけど、今回、岩永さんや大塚さんとお話して原爆の恐ろしさをさらに感じました。そして過去の悲しい出来



愛知県 半田市 那須陽向・真季 記者

地球上の人々が戦争のない世界で生きるには？

長崎に落とされたたった一発の原爆は本当に恐ろしく悲しいものでした。そして、原爆は過去の話ではなく、いま世界中に多く存在することを知りました。僕たち家族は、地球上の人々が戦争のない世界で生きられるのかを考えました。戦争や原爆の怖さを情報発信する皆さんのように、おやこ記者で学び感じたことを友達や周りの人に伝えたいです。いつか皆さん、長崎でお会いしましょう。



大阪府 茨木市 岩崎歩美・惣一 記者

目標を立て、平和な世界を作っていききたい

取材した人たちの伝えたいことが聞けて、自分ができることが分かった。長崎に行くと、サッカー選手が平和宣言するのを見て、自分も目標を立てて、平和な世界を作りたいと思いました。そして、いろんな人に戦争が起こるとどうなるのかを伝えたいと思いました。



広島県 東広島市 道上香蓮・有香 記者

歴史を正しく知ることが平和への一歩

今回の取材の中で、特に印象に残った言葉は「声を上げ続けなければ平和は保てない」ということです。被爆者や伝承者の方々が辛い体験を語り、また、歴史を正しく知ることが平和への一歩だと知りました。これから少しずつ平和を学び、周りにも自分の言葉で伝えたいと思いました。



高知県 高知市 向井空・真樹子 記者

戦争について周りの人と皆で語りた

息子の空は「戦争について、今まで学校などで学んできたから知っているけど、おやこ記者のおかげで、戦争は人々の生活をダメにする感覚が改めて分かった」と感想を話しました。私自身にとっては、三瀬さんが被爆体験を様々な人たちに伝えていくことや、平和大使のお二人が思いを強く持ち、将来にも繋げていきたいと思います。今回、私の両親だけでなく、イギリス人の夫の家族からも体験を聞くことができ、戦争について周りの人と皆で語る必要があると感じました。



宮崎県 日向市 黒木結布・千恵子 記者

「核兵器のない世界」を実現するために

今回の取材を経て、被爆者の方のつらい記憶や「一度と同じような経験をしたい」という思いを知りました。祈念式典の中継ではこれまでとは違う気持ちで黙祷をしました。私は松尾さんの「核兵器がなくなるまでは、安心して眠るこ



写真は宮崎日日新聞提供

沖縄県 石垣市 米田智駿・美由紀 記者

努力の上にある平和

おやこ記者で、普段はインタビューできない方々と出会うことができました。綿貫円さん、小峰秀孝さん、川瀬美香さんとお話をしてわかったことは、三人とも戦争はだめだというメッセージを発信し続けていることです。また、強い情熱を持って平和活動を続けていることです。平和を願う人がつながり、努力して、戦争のない世の中は作られるということを深く学ぶことができました。平和への思いを改めて心に刻み込みたいと思います。



大学生ボランティアが親子記者事業をサポート！今年度も長崎県立大学シーボルト校国際社会学部 金村公一ゼミや新聞制作演習の学生、院卒生が取材、撮影、編集をサポートしました。親子を軸にすべての世代に平和な世界への志を広げたい！という思いを深めたコロナ禍での親子記者事業でした。長崎県立大学シーボルト校 金村研究室 金村公一

創価大学 文学部 (4年) 江上瑚日夏さん 原爆や平和について考えるきっかけを全国に広げていくとても素敵な事業で、子供達の積極的に学ぶ姿に、私も学ばせて頂きました。

長崎県立大学 国際社会学部 (3年) 花浦彩乃さん 次の世代への継承のため、新しい手段を用いて戦争の恐ろしさを語り継いでいます。私にできることを考えて行動していきたいです。

長崎県立大学 国際社会学部 (3年) 堀川理乃さん 印象的だったのが、手形アート。これからも、老若男女みんなと一緒に、平和への思いを表現できる世界であってほしいと感じました。

ピース・ハブ・ナガサキ代表 (長崎県立大学大学院卒 金村研究室) 前田真里さん どう継承する？ 自分に何が出来る？ 一緒に悩みました。どこにいても平和を願う気持ちは、みな同じ！ 心のつながりを感じました。